

自ら課題を見付け、主体的に学ぶ児童の育成

—関わり合いや対話を重視した家庭科学習を通して—

千葉市立新宿小学校 教諭 君塚 久美

《研究の概要》

本研究は、課題意識を継続的にもちながら主体的に学習に取り組む児童の育成を目指したものである。そのために、自ら課題を見いだせるような導入の工夫、個の学びや協働的な学びの場の設定を行った。関わり合いや対話を重視しながら学習を進めることにより、自分の考えを広げたり深めたりしながら生活の中での課題を自ら解決しようとする児童の姿が見られるようになり、問題解決的な学習の実現につながった。また、児童自身が自分の成長を感じられるようになったことで実生活での実践につながった。

1 問題の所在

「千葉市学校教育の課題 21世紀を拓く」において家庭科では、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成するための授業の工夫改善を図ることを目標としている。小学校学習指導要領解説家庭編では、資質・能力の育成に向けた授業づくりのために、題材などの内容や時間のまとまりを見通して、問題解決的な学習や主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図ることが示されている。

全国的に見ても家庭科の学習が好きという児童は多く、本学級でも87%の児童が家庭科が好きと回答している。そして、国立教育政策研究所の調査によると93.5%の教師が実習や観察を取り入れた実践的・体験的な授業を行っていると回答している。一方で問題解決的な学習を取り入れた授業を行っている教師は53.1%となっている。家庭科は実習の多い教科であり、児童は楽しく取り組んでいるものの、教師側から提示された製作の課題に取り組むことが多い現状がある。学習指導要領や「千葉市学校教育の課題 21世紀を拓く」で示されているような問題解決的な学習はあまり行われていないことに課題があるといえる。

本学級の児童の実態においても、家庭科の学習をするときに自分で学習問題を作ることができると思う児童は全くいなかった。問題解決的な学習とは、児童にとって1時間ずつ単純に積み重ねていく学習ではなく、自らの課題とゴールを意識しながら進めていく学

習といえる。自らの課題をもつことができなければ、主体的に学習に取り組むことはできず、教師から指示されたことを行うだけの学習になってしまうと考えられる。しかし、学習問題を考えようと投げかけるだけでは、児童は課題意識をもつことができない。そこで、導入の工夫をし、実生活との関わりを考えさせれば、児童が課題意識をもって学習に取り組めると考えた。また、導入で児童に課題意識をもたせたからといって、必ずしもそれが継続するわけではない。そこで対話を通じて生活の中での課題について考えを深め、個の学びと協働的な学びの場面を工夫することで、継続的に課題意識をもち、主体的に学習に取り組む児童の育成が図れると考えた。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究では、自ら課題を見付けるような導入場面を考え、それらを解決していくような学習活動を充実させたり、関わり合う場面を意図的に取り入れたりすることで、継続的に課題意識をもちながら学習に取り組む児童の育成を図ることを目的としている。

(2) 研究の方法

- ①過去の実践から効果的な手立てを探る。
- ②授業実践を通して、課題意識をもち主体的に学習に取り組む手立てを明らかにする。
「食べて元気に」(B衣食住の生活)
「生活を支えるお金と物」(C消費生活・環境)
「暖かく快適に過ごす着方」(B衣食住の生活)

3 研究の内容

(1) 過去の実践より

第6学年「クリーン大作戦」の実践をした際、導入時に学校内の汚れ調べを行い、汚れや汚れの落とし方を観察する時間を設けた。また、自分が解決したい学習問題を設定し、実際に体験や実験を取り入れながら、課題を解決していくような題材構成にした。自分が清掃したいと思った場所の汚れを落とす方法を考えたことで、決まった手順や方法だけでなく、よりよくするために試行錯誤する姿が見られた。このことから、課題意識を継続させるには、導入時に実践的・体験的に学ぶ活動を取り入れ、自分の課題を解決できるような時間を取り入れることが効果的だと分かった。一方で、清掃場所や清掃方法を自由に考えさせたことで、定着させるべき、知識・技能の観点からは少しそれてしまうことがあった。この点から、教師の関わる機会や投げかけの仕方などの改善の必要性を感じた。

また、自分では気付かなかった考えや方法を取り入れていくために、グループ編成を工夫したり、ペアで評価し合ったりする場面を取り入れた。清掃の手順や用具を試す場面では、似た課題をもって取り組んでいる児童同士でグループを組み、最後に報告する時間を設けた。そうすることで、友達の実践のよいところを自分の活動に取り入れ、よりよい工夫を考えることにつながった。このことから協働的な学習を取り入れることも児童の課題意識を継続させるためには効果があると考えた。一方で、グループでの活動を重視するあまり、個人の考えをもたずに話し合いに参加したり、グループの友達に頼りすぎたりする姿が見られ、個での学びの時間を確保していくことの必要性を感じた。

(2) 研究の視点

上記のような過去の実践を基に視点を二つ設定した。

視点1 自らが課題を見いだせるような導入の工夫

家庭科は実生活と大きな関わりのある教科であり、他教科に比べ、自分の生活経験を基に意見をもつことができるが、当たり前なこととして特に意識していないことが多い。そこで、導入時に①題材とじっくりと向き合うこと②今までの自分の考えや友達の考えなど

との比較を取り入れること③教師の投げかけのタイミングを工夫することの三点を意識するようにする。そうすることで「不思議」「なぜ」などの経験や既知とのずれを感じさせること、「何とかしなくては」という必要感、切実感をもたせるようにしていく。このような三つの点を意識することで児童が課題意識をもつことができるようになるかを見取っていく。

視点2 個の学びや協働的な学びの場の設定

一人一人の問題意識をもたせた後は、どのようにその問題を解決していくかが重要になる。個に応じた学び、協働的な学びを一体に考えて場を設定していく。また個での学びの後に協働的に学ぶ場を設けることで、自分が考えたことを自信をもって友達に伝えたり、友達から聞いたことと自分の考えを比較して、考えを広げたり深めたりすることができると思う。そして、協働的な学びのときには、必要感のある対話の場面を設定するとともに、ペアやグループ、学級全体などその場に応じて適した人数で行うようにする。また、自分のことを伝えるだけでなく、質問する場面を作ることで考えが深まっていくかも見取っていく。

(3) 授業実践

① 食べて元気に

学習過程	時数	学習内容
①課題発見	2	・みそ汁の作り方を予想し、友達と交流する。 ・正しい作り方を知り、個人の学習問題を作る。
②解決方法の検討と計画	1	・個人の学習問題をどのように解決できるか考える。
③課題解決に向けた実践活動	5	・自分の課題を解決するために、実験を行う。 ・ごはんの炊き方を知る。 ・ごはんのみそ汁の調理実習を行う。 ・栄養素について知る。
④実践活動の評価・改善・実践	2	・実験結果のまとめ、交流 ・振り返り ・お弁当の日にに向けた献立作成

[資料1] 指導計画と学習内容

この題材は[資料1]にある題材構成で行った。自分の課題を解決するための実験は、調理実習に向けての課題意識をもたせること、実生活での実践への意欲をもたせることの二つをねらいとしている。

視点1 みそ汁の作り方を予想する。

みそ汁について知りたいことや疑問があるか、及び

みそ汁の作り方を聞いたところ、[表1]のようになった。疑問は「なし」とした児童でも正しい作り方を理解している児童は少なかった。児童は作り方について、何となく知ったつもりでいるが、正しい作り方を知らないことに気付いていないという現状が明らかになった。また、疑問があると答えた児童の疑問も家庭科の学習で身に付けさせる知識・技能と大きく離れていた。

[表1]みそ汁に関する疑問の有無

		正誤人数	誤答内訳
あり 3人	正答	1人	だしなし、手順、みそを入れるタイミング、実を入れる順番、切り方等
	誤答	2人	
なし 27人	正答	2人	
	誤答	25人	

そこで、児童が作り方を予想したワークシートを基にグループ内で友達と作り方について交流した([資料2])。すると、手順やみそを入れるタイミングなど、自分と違った考えがあり、新たな疑問に気付く児童がいた。グループでの交流の後に全体で題材を貫く学習問題を「みそ汁を作るときには、どのようなポイントに気を付ければよいのだろうか。」と設定した。

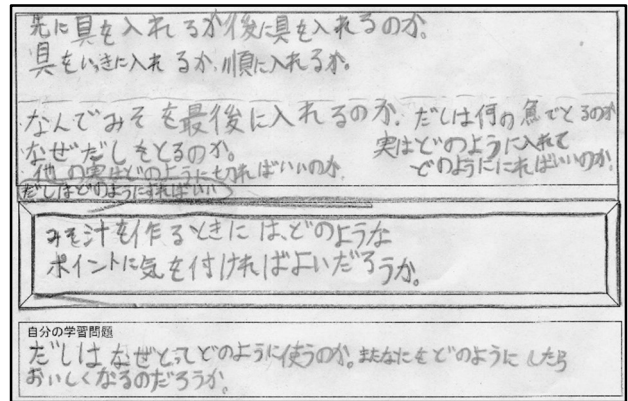


[資料2]グループでの話し合いの様子

グループで交流することで、自分にはなかった視点を得た児童が多くいた一方で、だしについては記述している児童が多くなかったため、だしについての疑問が出ている児童は少なかった。問題解決的な学習で課題とするものと、知識・技能の面として身に付けさせなければならないものが乖離していると、学習として適しているとは言えない。そこで、学習指導要領より本題材で身に付けさせたい知識を「だしのとり方」「実の切り方」「実の入れ方」「みその香りを損なわない扱い方(入れるタイミング)」とし、2時間目に正しいみそ汁の作り方を全体で確認した。そうすることで、正しい作り方を理解するとともに、それに基づいた新たな疑問をもつことにつながった。その後、それぞれが解決したい課題を決め、個々の学習問題を設定した。

A児は最初の段階で疑問をもっていたが、それは「豚汁とみそ汁の違いは何か」というものだった。しかし、

友達と自分が考えた作り方の違いや、本来の作り方と異なる点などについて話し合いをすることで、みそ汁づくりのポイントに迫る疑問がいくつも出てきた。そして自分の学習問題を「だしはなぜとって、どのように使うのか」と設定することができた([資料3])。



[資料3]話し合い後のA児のワークシート

視点2 自分が解決したい疑問に応じた実験をする。

まずは、個人が解決したい課題に応じた実験の方法を考えた。解決したい疑問は大きく分けて「だし」「切り方」「手順」に分かれた。その後、同じ疑問を解決したい児童でグループを作り、どのようにしたら解決できるか考えるようにした。自分たちで計画を立てることは家庭科では初めてだったのでグループで実験を行った([資料4])。

実験結果を各自がまとめた([資料5、6])後に生活班に戻って結果を共有することによって、自分が行っていない実験の内容もある程度は理解できるようにして、調理実習につなげた。

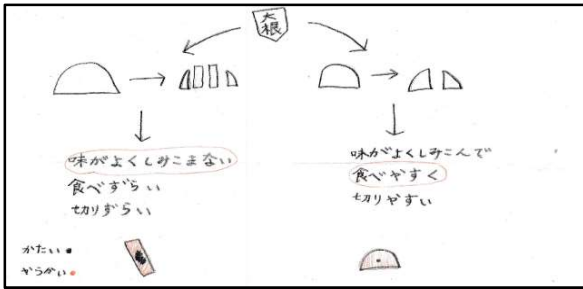


[資料4]グループごとの実験の様子 だし(左) 切り方(右)

	あり	なし
味	・深みがある(?) だしより味が濃い。 ・水が入っている感じがしない。 ・おいしい。	・水っぽい。 ・何か1つ足りない気がする。物足りない。
色	・だしより少し白っぽい。 ・いろんなものが混ざっているような色。	・時間がたつとみそが真ん中に集まるときは、周りの色はなかった。 ・水?
におい	・いいにおい。 ・味噌だっ、感じがした。	・あまり変わらないうえと、少し物足りない感じがした。

↳ 味とにおいには差があったけれど、色は見分けが付かない事が分かりました。

[資料5]だしの実験をした児童の実験のまとめ



〔資料6〕実の切り方の実験をした児童の実験のまとめ

時数	内容	感想
第1時	みそ汁の作り方を話し合う。	友達とは一緒にの考えではない人もいるから意見が違う人と話し合うことで疑問がたくさん出てきた。
第2時	自分で解決する学習問題を作る。	実際に作り方を知って、新しい疑問が出たから、まとめまでしっかりできそうな学習問題を作ることができた。
第3時	問題解決するための実験を行う。	ずっとふつとうさせると味がこくなるってしまったから、他の料理でもふつとうさせたらこくなるかと疑問に思った。
第4時	調理実習でみそ汁を作る。	最初は「実はどの順番でもいい。」と思ってたけど、火の通りにくい物から入れることで他の実もちゃんとおいしくなったからちゃんと意味があることが分かった。

〔資料7〕振り返りから見えるB児の考えの変容

最初は疑問はないとしていたB児だったが、毎時間の振り返りより、友達と話すことで、疑問が出て更に思考が深まった様子が分かる（〔資料7〕）。特に他の料理でも沸騰させたら味が濃くなるかという疑問は実生活につながっていると捉えることができる。また、調理実習を行うことで、実の入る順番の意味を理解することができており、当初の予想との変容が見て取れる。このB児の姿からも導入の工夫や個に応じた学び、協働的な学びの場面を工夫したことが、課題意識をもち主体的に学習に取り組むことにつながったと考える。

②生活を支えるお金と物

過程	時数	学習内容
①	1	・座標軸を活用し、題材を貫く学習問題を作る。
②	1	・友達と話し合い、本当に必要な買い物か考え、買い物をするときの観点を考える。
③	1	・売買契約について知る。 ・買い物の仕組みを知り、どのように買い物をしたらよいか考える。
④	1	・上手な買い物の仕方をまとめる。

視点1 欲しいものを座標軸に整理し、本当にそれが必要な物か考える。

クリスマスや正月があり、児童が自由に使えるお金が増える冬休み前に欲しい物を付箋に書かせた。そして〔資料11、12〕のようなワークシートを用意し、縦軸を「必要」「必要でない」横軸を「安い」「高い」とし

た座標軸に整理させた。ほとんどの児童は値段に関わらず、付箋を上半分に置いていた。そこで「これを全部買ったらどうなるか」と問いかけた。すると、児童からは「お金がなくなってしまう」「将来お金に困るかもしれない」という回答が出た。そこで「全部買わなければいいのかな」と再度問いかけたところ、そうではなことに気づき、「かしこい消費者になるにはどのようなことに気をつけたらよいだろうか」という題材を貫く学習問題を作ることができた。クリスマスや正月に実際に自分が欲しい物を挙げたことで、実生活を意識して、課題をもつことができた。

視点2 友達同士で本当に必要かどうかを考えさせる質問をし合う。

自分だけでも本当に必要か考えることはできるものの、友達と質問をし合った方がより深く考えたり、自分にはなかった視点に



〔資料8〕ペアでの話し合いの様子

気付いたりするのではないかと考え、ペアで相手の欲しいものが本当に必要か質問し合う場面を設定した（〔資料8〕）。様々な考えを知ったり、できるだけ多くの視点で考えたりできるように話し合いを相手を変えて三回行った。C児とD児は服について話し合った。

C：ここに服ってあるけど、服はもうあるんじゃないの。
D：たしかにあるけど、そんなにたくさんないから買いたい。でも高いし…
C：安いのを買えばいいよ。ぼくだったらそうするけど。しかも今買ってもそのうち着れなくなっちゃうかもしれないじゃん。
D：でも高い物の方がいい物だから長く使えると思うよ。
C：たしかに。でも、安い物なら好きな物がいくつも買えるよ。
D：うーん、悩む…

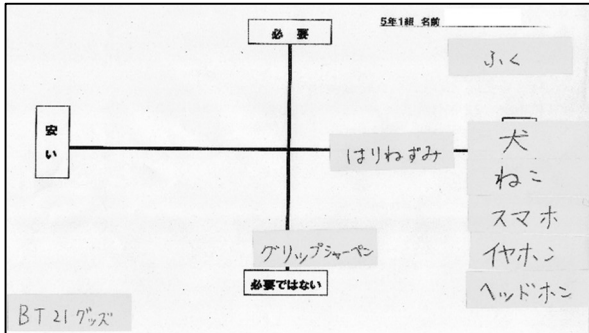
〔資料9〕C児とD児の話し合い中の会話

C児：D児と話してわざわざ高い服一着より安くしているような種類を買ったほうがいいと思った。D児は高い服を長く使うと言っていた。
D児：服は高くても必要にしていたけど、友達が安くても買えるのではないかと聞いていた。友達と話をしていて考えが変わることがあった。全然そういうことを考えずに買っていたので冬休みで買い物があったら気をつけたいし、家族にも教えたい。

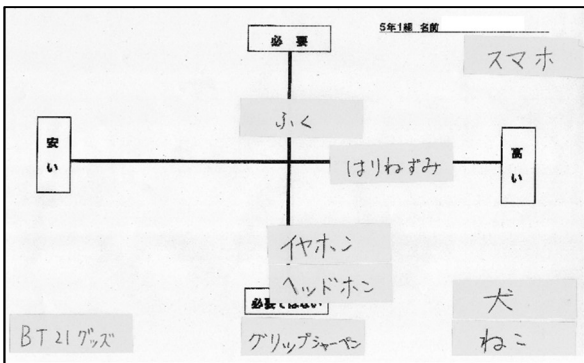
〔資料10〕C児とD児の振り返り

会話の様子や振り返りから（〔資料9、10〕）D児の考えの広がりを見取ることができる。値段という視点

で話し合いが進んでいるものの、C児は安い物を優先し、D児は高い物を優先しようとしている。異なった考えをもつ二人が話し合いをすることで、お互いが自分になかった考えを取り入れていることが分かる。



【資料11】友達と話す前のD児のワークシート



【資料12】友達と話した後のD児のワークシート

D児は、座標軸において当初は服を「必要」「高い」に分類していたが（[資料11]）、C児との話し合い後、必要度には変化があまり見られないが、値段は「安い」方に動かしている（[資料12]）。D児の中で新たな価値観が生まれたと捉えることができる。

シャーペンを買おうとしたけど、何個もあったから買うのをやめた。服を買いに行き、あまりないから買うことにした。授業でC児が言っていたことを思い出して、値段が安いものをいくつか買った。

【資料13】冬休み中の買い物に関する振り返り

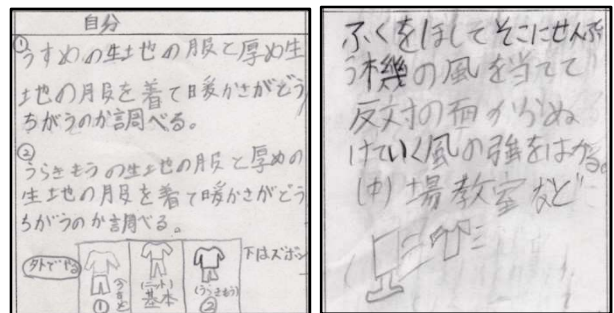
また、D児は冬休みに実際に服を購入したようだが、冬休み明けの振り返りから、実生活でも学習で得たことが生かされていることが分かる（[資料13]）。

③暖かく快適に過ごす着方

過程	時数	学習内容
①	1	・題材を貫く学習問題をもとに、個人の学習問題を作る。
②	1	・実験方法を考え（個）、友達とアドバイスし合う。
③	1	・実験を行い、暖かい着方について探る。
④	1	・実験の結果を共有し、暖かい着方についてまとめる。

視点1 学級全体で考えた題材を貫く学習問題を基に自分が調べたい学習問題を設定する。

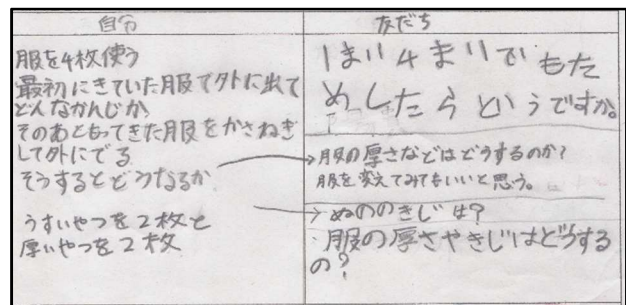
1月の中旬に行った校外学習は、屋外での活動になるため、事前に「暖かい着方をしてこよう」と児童に伝えた。その後、題材の導入時に校外学習での児童の服装を想起させ、「なぜ冬に着る服は暖かいのか」と問いかけた。児童は自分なりに予想をし、学習問題を設定し、どのような実験をすれば自分の予想が確かめられるか方法を考えた。これまでの二つの題材での学習を生かし[資料14、15]のようにそれぞれが自分の予想をもとに実験を考えることができた。



【資料14、15】児童の考えた実験方法（E児、D児）

視点2 ①本当にその実験で確かめられそうか友達からアドバイスをもらう。

自分で見付けた課題を基にまずは個人で実験方法を考えた。その後、その実験で確かめられるかどうか友達からアドバイスをもらうようにした（[資料16]）。友達からアドバイスをもらったり、友達にアドバイスをしたりすることで、その実験で本当に自分が知りたいことを確かめられるのか深く考えることができた。この児童は、衣服の枚数だけでなく、どのような厚さの服を使うか、生地はどうするかというところまで考えが広がり、自分の実験に生かすことができた。



【資料16】実験の方法を考えたワークシート

②自分が確かめたいことを基に個人で実験する。

全ての児童が自分なりに実験方法を考え、自分の考

えた実験を行った。しかし、自分の行った実験だけでは、暖かい着方を全て知ることができないので、その後、交流をして結果を共有した。結果を交流することで、自分だけでは気付かなかったことに気付く姿や、自分の実験と友達の実験の結果を合わせて、暖かい着方について考察することができた。



[資料 17] 通風の実験 (左) サーモグラフィを用いた実験 (右)

3 研究のまとめ

(1) 成果

[表 2] 学習前後の児童の実態調査

	1	2	3	4
①自分で学習問題を作ることができる。	87%	13%	0%	0%
②課題に対して自分で解決の計画が立てられる。	4%	24%	40%	32%
③学習していることとこれまでの学習を結び付けて考える。	61%	32%	7%	0%
④話し合いのとき、友達の考えを比べながら聞いている。	0%	20%	44%	36%
⑤自分の考えをもつ根拠を大切にしている。	16%	42%	39%	3%
	8%	12%	60%	20%
	13%	26%	29%	32%
	0%	16%	48%	36%
	13%	32%	36%	19%
	4%	16%	40%	40%
上段が7月、下段が2月の結果				
1：全く当てはまらない 2：あまり当てはまらない				
3：当てはまる 4：とても当てはまる				

三つの題材で検証した結果、どの題材でも二つの視点を意識することで、児童が課題意識を継続してもち、主体的に学習に取り組めることが分かった。また、問題解決的な学習を意識したことで、学習内容を自分事と捉えることができた。自分事として主体的に学習に取り組むことができたので、教師から実践の課題を出さなくても、日常生活の中で家庭科の学習に関することに興味をもつ姿や実践する姿が見られるようになった ([資料 18])。

- ・洗濯物が終わった後に最近、生地を細かく見る機会が増えた。
- ・お母さんがいつも料理しているときに五大栄養素の問題を出したり答えたりするようになった。

[資料 18] 児童の振り返りの中で家庭での実践に関する記述

さらに、対話を中心として関わり合う活動を取り入

れることで児童が友達と関わる良さに気付いたこと ([資料 19]) は、家庭科の学習だけでなく、他教科の学習にもつながる成果だったと考える。

- ・4月は家庭科の授業が苦手だったけど、友達と意見を言うことでもっと考えが深まった。
- ・自分の考えを伝えると相手のためにもなり自分のためにもなるからこれから自分の考えをどんどん伝えたい。
- ・人の意見を聞くことは大切だということが分かって、聞くことで自分の考えが深まったりほかの意見を知ったりできた。
- ・自分一人で全てできる人はいない。だから話し合いをして興味が深まったり分かったりするようになっていく。これは家庭科だけではなく生活全体に関わってくる

[資料 19] 児童の振り返りの中で関わり合うことに関する記述

[資料 20]の振り返りからも、自ら課題意識をもち、その解決に向けて取り組む、問題解決的な学習ができていることが分かる。課題意識をもつことにより、自分事として主体的に学習に取り組むことができた。これは導入の工夫をした成果だと考える。課題をもって学習に取り組むことで、学習後の自分の成長を感じることができ、実生活での実践の意欲へとつながった。これは課題意識が学習後も継続していると捉えることができ、手立てが効果的だったと考えることができる。

- 生活から気になることを見つけて自分で学習問題を立てて解決して、自分で最初からやってるからちゃんと分かるし、新たに自分でやる力が身につくようになってよかった。また、それが生活に生かしているから、できることが増えたり成長していったりしている気がする。お家でできることをこれからがんばりたい。

[資料 20] 児童の振り返り

(2) 課題

三つの題材で実践し、内容項目 B 衣食住の生活、C 消費生活・環境の二つの内容項目での効果を確かめることができた。内容項目 A 家族・家庭生活についても、どのような授業構成が考えられるのか更に研究を深め、実践していきたい。

【主な引用/参考文献等】

- 伊藤葉子『新版授業力 UP 家庭科の授業』日本標準 2018
- 中田正弘『ポジティブ&リフレクティブな子どもを育てる授業づくり』学事出版 2020
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター「平成 24 年度学習指導要領実施状況調査 教科等別分析と改善点」2012
- ベネッセ教育総合研究所「小中学生の学びに関する調査報告書」2015